

小林秀雄の学問

奈良 敏行（笈の定有）

根岸吉太郎監督作品の「ゆきてかへらぬ」を見た。中原中也・長谷川泰子・小林秀雄の三つの才能の交錯するドラマだ。青春は「途上」の存在であるが故に、自分の欲動の現れを評価するものは自分自身でしかない。その孤独な時間は重苦しいものだ。この自己撞着の時間から外部へ抜け出すには自恃しかない。依存関係の中でその自恃がぶつかり合うと魂を毀損せずにはおかぬ。小林秀雄だけが外部へ出る事ができた。評価の矛先を自己から他者へと切り替えることに成功したのだ。詩人は自分に見えるものに釘付けになり、殉教する。言葉を自然と紐付けず、言葉と言葉の格闘とみなした小林の発見が小林を救うこととなった。ひとはこれを批評と呼び、小林は日本の文芸批評の祖となった。この道筋は大岡昇平の『朝の歌』に詳しい。

映画を見て数日後、わたしは県立図書館の開架棚の通路を貸出カウンターに向かって歩いていった。視界に突然飛び込んできたものがあった。『小林秀雄の悲哀』（橋爪大三郎）という本だ。小林秀雄の批評は失敗だったという内容の本だった。最晩年の「本居宣長」が失敗だった、そもそ

も本居宣長を「批評」で取り上げること自体が無理なのだという論旨だった。

本を読むことが自己救済であり、そしてその自己救済の方法としての「批評」を確立した小林秀雄、それを全否定する議論だった。

橋爪大三郎は「小林は、野生のままの知性だ」という。《学問の方法でも知識でもない、対象の本質をすなおに掴み取る、直感こそが〈学問〉の極意だよ。》

この小林秀雄の方法に対し、橋本大三郎は次のようにいう。

《大学院のゼミであれば、報告は打ち切り、来週最初からやり直し、と言うしかない。》

「野生の知性」に対してとても厳しい言葉だと思った。「大学院の知性」が重く権威的にのしかかってくる。

そんなとき橋本治の『小林秀雄の恵み』という本に出会った。中也と小林の青春は表裏一体のものだった。小林は本を読み、中也は自然の音楽に耳を傾けた。この違いが生死を分けた。小林は本を読むことの楽しさを「学問」と呼んではいけないうかと思ひ始める。もともと知の科学主義を否定するところから出発したので、「野の学問」と呼ばれてもしかたがなかった。小林秀雄の同時代人は初めて、「本」を読んで自分で考える方法を手にし始めたの

だ。小林秀雄は「意匠」（学問）が本質を隠していると指摘して登場したのだ。

橋本治は小林の孤独な戦いの核心を次のようにいう。小林の言葉だ。

《学問しようとするわたしの前には、その私の内容を理解しようとする知知的権威がいる》

橋本治は「日本の学問は、近世になって誕生する。その始まりが『中江藤樹』だ」という小林の言葉を引いている。知の権威は仏教だった。学問とは「仏教」だったのだ。そこに隙間を作っていくのが野の学びだった。本居宣長は和歌を好み数多く読んだが我流で、そのことを大事にした。「彼の和歌は、他人と交流しない和歌なのである」と小林はいう。

これらの野の学の欲動を拾い上げる小林の手法を見て、小林の中では近世の学問がすでに近代の学問になってしまったのではないかと、橋本はおののく。

《西行は、応えてくれるものが、なにもない》

《西行は、自分の外に、自分に応えてくれるものが何もないことを発見した》

ここには近代人の自我が生まれている。

《学問をする者にとって〈独〉が当然の方法である。》

《独創的な考え方をする彼等が、根本のところ世の中か

ら相手にされていないからである。》

橋本治は三七歳まで小林秀雄には興味がなかったという。小林は同時代人とともに生き、一歩先行して考える。小林の仕事はその同時代に完結した「古典」だ。後世が会場には、再解釈が必要だろう。橋本自身は小林秀雄に関心がない、しかし「小林秀雄を必要とした日本人」とは何かについては考えてみたいという。そこに小林秀雄の「恵み」、つまり知恵があるのだ。

わたしは本屋の人間として「本」を読む。本屋の人間とは「本屋」よりも、本屋という「恵み」を生きる「人」を考え続ける人間のことだ。小林秀雄の恵みとは何んだったのですか？と問われたら、わたしは本を読むということ。は「学問」ではなく、本を読み続ける人が主語の世界だという教えたど答える。「学ぶ」、独りで本を読む、それが青春の閉塞から外部へ出た人の軌跡だったのかもしれない。

本は人を救う、しかし、人を救う本というものはない。

2025.03.27

大岡昇平 『朝の歌』 角川書店 1958

橋爪大三郎 『小林秀雄の悲哀』 講談社選書メチエ 2019

橋本治 『小林秀雄の恵み』 新潮社 2007

小林秀雄 『本居宣長』 新潮社 1977